

## 郊外と都市

### ワイマール時代の小説に見られるベルリンの周縁

鷺巣 由美子

#### 1. はじめに

ベルリンはプロイセンの首都からドイツ帝国の首都となって以来急激な発展を遂げた。首都となり、また鉄道の発達と結びついて産業の発展したベルリンは、周辺の農村地帯の人間を惹きつけ、首都には働き口を探す人々が大量に流れ込んだ。1920年に統合され大ベルリンとなる地域の人口は、1871年には約10万であったが、1900年には270万、そして1919年には380万となっている。これに伴いベルリンを取り囲む地域も変化し郊外が成立していった。1890年代後半にベルリン旧市街の人口が飽和状態になると、旧市街を取り巻く地域（シャルロッテンベルク、ノイケルン、シェーネベルク、ヴィルマースドルフ、シュテューグリッツ、シュパンダウ）に人の流れは移り、この地域の開発が始まった。20世紀に入るとこれらの地域も人口過密となり、パンコーヤライニケンドルフなどの周辺の中小都市に人が流入するようになった。

郊外は都市および田園と境を接する領域であり、両者のどちらとも完全には同一化していない独自の空間である。この空間はまたすぐれて近代的なものである。ベルリンは、中世には市壁で、そしてバロック時代には星形稜堡によって、明確な境界を示していた。しかし社会の産業化にともない都市部の人口が増大し居住空間が狭くなり、また工場が広い土地を求めて周辺へと移転していき、都市の境界は明確さを失っていった。「初期の時代には都市を市壁で閉じることが大原則だったが、こうして近代化の果

てに都市は開放的となる。それは市街地が郊外へとスプロールしていくことと同時に、周辺からあらゆるものが入り込んでくることを意味した。」<sup>1)</sup>

ワイマール時代は都市化が大きなテーマとなった時代であった。19世紀末以来の急激な都市化の問題が表面化し議論されるようになっただけでなく、芸術においても都市をテーマとした作品が多く生み出された。ジャーナリズムや文学において、ベルリンについてのテキストが数多く書かれた。こうした都市の隆盛に較べると郊外の発見は遅れているように思われる。郊外が描かれているテキストの数は圧倒的に少ない。これは、郊外が成立してきたばかりの空間であり、また、都市でも田園でもない新しいタイプの場所であるためではないかと思われる。ではこの新たな空間である郊外は、いかに知覚され生きられたのか、さらにそこにはどのような意味が付与されていったのだろうか。本稿では郊外についての数少ないテキストを手がかりに、近代の空間としての郊外を探ってみたい。

## 2. 郊外の成立

シェフラーは1910年のベルリン論『ベルリン ある都市の運命』で、ベルリンにはいまだに郊外がないと嘆いている。パリの周辺には人の手が入り都市の有機的な一部となっているのに対し、ベルリンとその周辺地域は対立する二つの世界を成している。「混乱するほどせわしない首都の生活と、周辺の森川の風景に永遠にただよう憂いとが作り出す対立ほど鋭く、融和しがたいものはない。ハーフェル川とシュプレー川の岸辺から起伏のある松林においていく砂地に立っていると、昔を思い浮かべるのはさほど難しくない。[...]最初の開拓者たちが集落を建設するために、森と沼地を抜けてここへやってきた時代を。」<sup>2)</sup>

1) 杉本俊多：ベルリン 都市は進化する 講談社現代新書 1993年 218-219ページ。

2) Scheffler, Karl: Berlin - ein Stadtschicksal. Hg. v. Detlef Bluhm. Berlin(Fannei&Walz Verlag) 1989. Nachdruck der Erstausgabe von 1910, S.169.

シェフラーがどの地域を念頭においているかは定かでないが、1910年にはベルリン周辺の開発もかなり進んでいた。ダーレム、グリューネヴァルト、ツェーレンドルフ、リヒターフェルデ、ライニケンドルフ、パンコーなどでは、1895年から1905年にかけての十年間で人口がほぼ二倍以上に増加している<sup>3)</sup>。

ライニケンドルフ、パンコーなどには市の中心部と同じような、風通しも日照もよくない、いわゆる賃貸兵舎 (Mietskaserner) が建てられた。それに対し、ツェーレンドルフ、ダーレム、グリューネヴァルトには、ヴィラ・コロニーが建設された。これは豪壮で広いヴィラの散在する高級住宅地であり、ここにはベルリン中心部の劣悪な住環境を逃れた富裕者層が移り住んだ。それと並行して、さほど富裕でない中流層のための、やはりヴィラ風の建物が並ぶ郊外住宅地も19世紀末から作られた。手の届く値段で郊外住宅を提供しようという試みがあったのである。土地建物は富裕者層を想定したものほど広くはなかったが、兵舎住宅に比べればはるかに広々して日光もあたる庭付きの住宅は、中流市民層には魅力的なものだったであろう<sup>4)</sup>。

こうした郊外の建設は、大都市化によって生じた諸問題の解決策であると同時に、大都市に背を向けた「自然」志向の流れの中に位置づけられるものでもある。1900年頃から盛んになった市の中心から郊外住宅への流出には、田園賛美、自然賛美という側面もあった。都市という「不自然な」環境に背を向け、自然に向かい、郊外の庭付きの近代的な家で心身の癒しを求める態度の根底には、当時興ってきたワンダーフォーゲル運動などと

3) Ribbe, Wolfgang(Hg.) : Geschichte Berlins. Bd.2. Von der Märzrevolution bis zur Gegenwart. München(Beck) 1987, S.694.

4) 郊外住宅地の成立、多様なタイプ、その住民の層などについては以下の文献を参照した。Ribbe, S.700-710. Posener, Julius: Vororte. In:Die Metropole. Industriekultur in Berlin im 20. Jahrhundert. Hg. v. Jochen Boberg, Tilman Fichter u. Eckhart Gillen. München(Beck) 1986, S.80-85.

も共通する、自然回帰のイデオロギーが認められる<sup>5)</sup>。ベルリン中心部と鉄道で結ばれ、市の中心まで比較的短時間で行ける地域に建設された郊外住宅地は、都市との差異を特徴とし自然を強調したものであった。

19世紀末から20世紀初頭にかけての郊外住宅建設に続き、20世紀には大型の団地が郊外に建設されていく。ベルリンには1900年頃から多様な階層と政治的方向の住宅協同組合が成立していた。住宅協同組合は第一次世界大戦後にその活動を本格的に展開し、それは郊外団地の拡大につながった<sup>6)</sup>。こうした近代的郊外団地の建設が目指していたのは、多くの場合「都市と田舎との対立を克服する」<sup>7)</sup>こと、すなわち都市の近代的生活を土地の安価な郊外で営むことであった。シェフラーは1931年の本で次のように述べている。現在の建築活動が告げ知らせているのは「無数の団地により大都市の精神を国中に広め、都市と田舎という有害な対立を克服すること」<sup>8)</sup>であると。郊外団地は良質の住空間を安価に提供するものであった。だが同時に郊外団地での生活は、郊外で都市部と同様の近代的生活を送ることであり、「都市と田舎との対立の克服」とは田園の都市化に他ならなかった。

郊外団地の重要な特徴として、この他に画一性を挙げておかなければならない。鋼鉄の骨組みとコンクリートによって作られた建物、装飾を排したファサード、規格化された間取り。こうした画一性は合理精神によって裏打ちされていた。すなわち建物の規格化の直接の要因は、安価で安定した素材の供給と建築作業の効率向上を目指した建築素材の規格化であった。画一化された住居では快適で便利な生活は保証されたが、一方で個人的なものや無駄なものは排除されるきらいがあった。

---

5) Posener, S.83f.

6) Novy, Klaus: Hochburg der Wohnreform. In: Die Metropole, S.120-124.

7) Gillen, Eckhart: Provinz/Metropole. In: Die Metropole, S.7f.

8) Scheffler, Karl: Berlin - Wandlungen einer Stadt. Berlin(Verlag Bruno Cassirer) 1931, S.171.

このように団地という形で急速に広まる都市化と画一化を目の当たりにし、これを脅威と感じた者も少なくなかった。ベルリンに体现される都市化に対する批判はすでに19世紀末から出てきていた。これを担っていたのは自然、伝統、文化の価値を重んじる保守派であった。しかし急激な都市化による混乱、喧噪、劣悪な環境、また鉄道網の拡大と郊外団地の発展がもたらした不安は、保守派に限らず多くの人に共有された。人間が都市化により精神の安定を失い、闇雲に欲望を刺激され、画一化、物質化された生活を送ようになる危険を感じ取る者が多かったのである。

### 3. 魔女からの逃亡 — 『ベルリン』

パウル・グルクの1926年の小説『ベルリン』（執筆は1923年から25年）は、屋台の古本屋を営む年老いたエッケンペンとベルリンとの戦いの物語である。エッケンペンはシレジア出身であるが、これは「真正銘のベルリン子はみなシレジア出身者」という当時のクリシェに従った設定となっている。彼は詩人を志したが成功せず、現在は屋台で古本を売っている。夜寝る間だけという契約で部屋を賃借りしている彼は、大半の時間を屋台の傍らで、すなわち路上で過ごす。だが彼は路上のできごとには加わらず、行き交う大衆に同化することもなく、もっぱら観察者でありつづける。彼は街路で生起するさまざまな出来事に決して関与せず、それを眺め反省する。観察を通じて出来事、生、都市の「本質」を求めようとしているのである。このような観察者にとっては都市は背後に、またはその内奥に本質的な意味を隠した現象である。

エッケンペンの視点から、まず都市は人間を部品として動いている巨大な機械と捉えられる。ここでは人間は職業において自らの「本質」を求めることなく、機械の一部となり番号化されている。彼らは「ベルトコンベアーで動く道具」<sup>9)</sup>なのだ。エッケンペン自身は、路上の古本屋という職

業を選び取り、この機械に取り込まれることを拒否している。彼は道をうねり流れる大衆の川に身を投じず、その川の傍らに立ったまま「打ち碎ける波」<sup>10)</sup>を待つ。このような描写から浮かび上がってくるのは、主体たる観察者エッケンペンと主体無き運動をなす大衆という、対立的構図である。その一方の大衆はベルトコンベアーにのった流れとなり、一斉に活動を始めたり停止したりする。近代産業社会の経済システムの中を循環する大衆の流れという像は、大きな歯車、巨大な機構と化した人間社会を映し出している。

都市はまた欲望のエネルギーを秘めた黙示録的な場でもある。アスファルトで覆われた都市の表面の下には「押し込められた原初の火、憎しみと妬みという煮えたぎる元素[...]が秘かに燃え立っている。」(S.249) 爆発、抑圧された欲望のエネルギー、また日食や崩壊する広場のヴィジョンも描かれる<sup>11)</sup>。人間は都市の爆発のリズムに「己れの意志なく」(S.16)身を任せ、翻弄される存在である。

都市のエネルギーは都市が人間から吸い取ったものである。人間の心臓から流れ落ちる血はアスファルトに染み込み下水道にまで流れ込む。下水道は都市の血管であり、ここで都市は単なる機械ではなく、血の流れる生物、有機体として捉えられる。「大都市の石の皮膚の下には心臓の血が流れる恐ろしい管が枝分かれしている」(S.206) 人間の感情、物質的欲望、

---

9) Gurk, Paul: Berlin. Berlin-Darmstadt(Agora Verlag) 1980, S.97. 以下、引用に際しては本文中にページ数のみ記す。

10) Gurk, S.95. 大衆を川ないし海として捉える見方は都市文学のトポスとなっている。特にボードレールの「群集」が有名である。「群集の中に浴みすることは、誰にでも出来るわけではない。群集を愉しむのは一つの芸術である。」ボードレール：パリの憂愁 福永武彦訳 岩波文庫 1969年(第12刷)31ページ。

11) 黙示録的現象としての都市は古くから文化的に構築されてきたイメージであり、古くは旧約聖書のソドムとゴモラ、またバビロンがある。また表現主義の詩や絵画でも黙示録的イメージに満ちた都市が頻繁に描かれた。表現主義においては既存の芸術との断絶、都市化というまったく新たな体験、そして差し迫る戦争が、黙示録的イメージ、旧世界の没落というモチーフの形成を促した。ルートヴィヒ・マイトナーの都市を描いた一連の絵、特に「黙示録的風景」シリーズでは、歪んだ構図、火山の爆発や真っ赤に燃え上がった太陽、裂け目のように走る道路などにより、黙示録的な混沌の場としての都市が描き出されている。

性的欲望はみな、都市の「血管」に流れ込んでいく。また都市に流れ込む血には、エッケンペンの友人のように、路上で死んだ者たちの血も混じってしよう。これらの血はすべて都市の血管に流れ込み都市の活動を維持し促すのである。

人間の血が流れ込む有機体としての都市像は、人間を飲み込む魔物という都市のイメージへとつながっていく。『ベルリン』では都市は直接に吸血鬼と呼ばれることはない<sup>12)</sup>。しかしエッケンペンは都市に「吸い込まれ、二度と再び山の中へ帰して」(S.11)もらえない。都市は「魂を喰らい[生の]意味を吹き払う魔物」(S.155)である。この魔物に対してエッケンペンの抱く感情はアンビヴァレントなものであり、つねに愛憎が入り交じっている。「偉大な女魔術師である都市はなぜ、わたしは彼女を愛するが彼女を暴力でねじ伏せることはできないと言ったのか。[...]彼女を憎んでいるが彼女から逃げ出すことはできないと。」(S.212f.)<sup>13)</sup> 「暴力でねじ伏せる」と訳出した語はvergewaltigenであり、ここには主体による世界の認識と男性による女性の征服を重ね合わせた言説のトポスを読み取ることができる<sup>14)</sup>。認識による世界の征服が女性の征服という比喩で語られることは珍しくない。むしろ西欧の言説ではこの比喩は繰り返し用いられてきた。しかし『ベルリン』では圧倒的な勝利者は都市であり、エッケンペンは都市の「内奥の本質」(S.235)を知り都市を征服することができない。そしてまさにこの理解不可能性こそ、都市がエッケンペンに対して発する最

12) イヴァン・ゴルが1929年にフランス語で発表した『ソドム ベルリン』では、はっきりと「吸血鬼都市」と言われている。ただしこの作品中には人間の血を吸い取る吸血鬼の描写はない。Goll, Ywan: Sodom Berlin. Aus dem Französischen von Hans Thill, Frankfurt/M.(Fischer Taschenbuch) 1988, S.42

13) ベルリンはその大都市化の過程で、歴史的コンテクストは異なるものの、つねに黙示録的世界として捉えられ文学と芸術において形象化されてきた。そして黙示録的世界の魅力と脅威とは、娼婦バビロンという表象に結晶される。娼婦バビロンとしてのベルリン像については、次の文献に包括的で詳細な記述がある。Bergius, Hanne: Berlin als Hure Babylon. In: Die Metropole, S.102-119.

14) 都市言説と女性との関連についての研究は次の文献に詳しい。Weigel, Sigrid: Wildnis und Stadt. In: Topographien der Geschlechter. Hamburg(Rowohlt Taschenbuch) 1990, S.115ff.

大の魅力となっている。都市は理解を越えた存在だからこそ、謎めいた都市の本質を知りたいという渴望を増殖させるのだ。

「ベルリン」では、こうした複合的な意味を与えられた都市像に対して「田舎」という対立項が立てられる。エッケンベンはある時「自然の静けさの中に」(S.157)都市から逃れようとする。「都市という怪物から逃れられるか、初めてやってみようと彼は思った。ひょっとしたら、この黙示録の獣の柱のような脚の間から立ち去れば、都市を打ち負かし遍歴する自由を再び勝ち取る気力が湧いてくるかもしれない。」(S.158)ここでは、田舎は魔女の息吹のかかっている場、魔女によって血を吸い取られ力を失っていく人間を匿い癒すものである。田園の自然は都市からの避難所であり、人間をその魔力で虜にし力を奪い取る都市に対し、庇護を与える母性的なものと捉えられている。

だがその田舎行きからしてすでに、都市と対立するものとしての自然という構図を疑わしいものにしてしている。この逃避行において彼はそもそも「自然に飢えた大都市住民の長い鎖を成す輪のひとつ」(S.157)である。目的地に向かう汽車の中で彼はまだ大都市を感じる。汽車は「この烏賊の化け物が豊かな田園にのぼしている触手でしかない。」(S.159) 触手を伸ばす怪物という神話的な像は、都市を描くトポスの一つである。これは1934年にパウル・ヴェーバーが描いた「大都市一蛸」にも用いられている。この風刺画では、大都市は触手を広げて周囲を征服しする怪物であり、さらにその触手の間には小型の蛸がうごめいている。都市は周囲に広がり、個人の生活のどんな片隅にも入り込んでいくのである。

汽車を降りれば田舎に逃れることができるという期待に反し、彼がそこに見出したのは都市の延長であった。通りをオートバイや自動車が走り抜け、村の宿屋の広間では蓄音機から流れ出る音楽に合わせて、近隣中の若者がフォックストロットを踊っている。ラジオからは「こちらはベルリ

ン・ウェーブ505です」(S.164)という声とダンス音楽が流れている。「ここもベルリンだ。」(S.163) 汽車で二時間ほどのこの土地も大都市の郊外となっている。汽車で二時間かかる道のりは、ここでは巨大な烏賊の触手にたとえられていることから明らかなように、二点間を隔てるものではなく、周縁を中心に結びつけるものとして捉えられている。かつての農村部はもはや都市の外部ではない。ここは都市の周縁にあり、都市部と同じ生活が営まれている。鉄道の発達による都市からの流入者増大と、ラジオなどのマスメディアによる都心部と周縁の同時性が、農村地帯の郊外化を促したのである。そして郊外化は、それを見せつけられたエッケンペンにとっては脅威であり、恐怖を呼び覚ます否定的現象である。その脅威を表現しているのが、周囲を飲み込み成長を続ける怪物という神話的なイメージである。「大都市はどれほど遠くまで広がり、石の口と鉄の歯で田園を食い尽くしてしまうのだろうか[...]」(S.163)

大都市を、郊外や周囲の農村地帯を文字どおり飲み込んでいく飽くなき怪物として最初に描き出したのは、表現主義の詩や絵画であった。アルミン・T・ヴェーグナーは「家並みの行進」で、家並を擬人化し、周囲を飲み込み踏みつぶしていく魔物として表現している。

引き裂かれ血を流す野よ  
 果てしなく広がる平野よ  
 お前たちは皆 我らの壁にあいている噛み砕く口に飲み込まれる。  
 我らが海の縁へと広がるまで  
 我々は疲れを知らない 飽くことを知らない。  
 山々の頂に達するまで  
 広大な芽吹く土地を多量に尽くすまで。  
 永遠の 果てしなき都市！<sup>15)</sup>

人間の本质、精神を求めた男エッケンペンは、この都市という怪物を相

手に絶望的な戦いを展開する。結局彼は自然を再発見することができずに都市へと戻っていく。エッケンベンは郊外の静寂の中で、自分が求めていた田園、自然にようやく出会うが、静寂の中で自然、そして自分自身と向き合うことに耐えられなかったのだ。帰りの汽車の中で彼は、自分は決定的に疎外の状態にあると感ずる。ベルリンでは彼は、人間を飲み込んでいく大都市を恐れたことはあっても、それに対峙する主体としての自分自身の変容は意識していなかった。だがここで彼自身も都市の中で変化していたことが明らかになる。彼は「母なる自然風土から失われてしまった」(S.182)のである。都市化の影響を受けていたのは周囲の田舎だけではなかった。

ベルリンに帰る汽車の中で彼は勝ち誇ったベルリンの声を聞く。この小説では上述のようにベルリンは頻繁に女性にたとえられるが、声を発するのは、あるいはエッケンベンが都市の声を聞くのはこれが初めてである。「わたしはベルリン、そしてすべての魂と自然風土をわたしの内に宿している」「わたしから逃れようとする者は、わたしの元に戻ってくる」(S.186)、「わたしはベルリン、わたしを憎む者は、わたしをもっとも愛する者」(S.187)。

吸血鬼や魔的な王女という形象で表現されたベルリンは、人間の理解を超えた脅威的な力で社会を変えていく都市化の動きの象徴である。田園の自然はこうした動きから逃れるための避難所となるはずであった。ここには、与え保護する母なる存在として自然を見る、西欧近代の自然観が色濃く反映している。西欧近代の産物である男性的主体は、田園の自然の中に母親と、母の懐に抱かれた「本来の人間性」を求めようとする。しかしかつて田園であったところには、特に汽車やマスメディアなどの技術革新に

---

15) Wegner, Armin T.: Der Zug der Häuser. In: Hier schreibt Berlin. Eine Anthologie. Hg. von Herbert Günter. Nachdruck der Erstausgabe von 1929. Berlin (Fannei&Walz) 1989, S.216.

より、郊外が成立している。加えて、田舎に逃げ込もうとする人間自身が都市の影響を受けている。こうした状況で、田舎は逆に、田舎をも飲み込む大規模な都市化のうねりを浮き彫りにする役割を果たす。「田舎の自然」は幻想にすぎず、都市化のプロセスからは誰も逃れられないことを示しているのだ。「ベルリン」では「田舎」対「大都市」という二項対立的構図が貫かれており、ここでは、居住空間、余暇空間としての新たな意味が郊外に与えられない。郊外は、都市に飲み込まれ変質した田園という否定的空間でしかない。

#### 4. ウィークエンド — 利用される自然

エッケンペンを捉えていた自然回帰、田園賛美の志向は、都市化のプロセスが始まると同時に19世紀末から生じ、20世紀初頭に運動として盛んになった。第一次大戦後もこれは都市化と表裏一体をなす動きであり、社会の都市化が進む中でその底流として流れ続けた。その一方でワイマール時代にはベルリンの美が初めて発見された。これにはまず、大都市を肯定的にとらえる精神的態度が関係している。ベルリンは、地方の偏狭さ、人間関係のしがらみ、伝統からの解放という意味を帯びるようになった。大都市での匿名性は、孤独というその否定的側面ではなく、束縛からの自由という肯定的側面が強調されるようになった<sup>16)</sup>。

僕は幸せ、僕はつらい  
海に入るかのように—  
だって友人たちも残していくのだから  
でも友よ、僕の後に続け  
しみつたれた恥辱から出て

16) Lethen, Helmut: Chicago und Moskau. In: Die Metropole, S.190-213. 特にS.194-200.

きれいな幸福を手に入れるための偉大な戦いに飛び込め<sup>17)</sup>

リングルナッツは1930年に書かれた「ベルリンへの引越」と題する詩でこのようにうたっている。ベルリンは戦いの場ではあるが、そこでは、地方都市や田舎のような狭苦しい人間関係から解放され、人間が自らの力で道を切り開くことができるとされている。ここには20年代に、労働や生活の合理化と密接に結びついて台頭してきた合理的で即物的な思考が、反映している。

合理的思考は余暇時間の過ごし方にも現れた。余暇時間を周辺の自然の中で過ごすことが盛んになり、周辺の湖や森林には、週末になると大勢の人がベルリンから押し寄せてくるようになった。その際自然は、労働により疲れた心身を癒し、健康を維持し、新たな労働力を養うための場と考えられた。周辺の自然は都市生活に奉仕する郊外となったのである。

当時の余暇についての考え方は、アメリカのウィークエンドの影響を受けて展開された。週末に郊外にでかけることの効用が説かれ、有意義な週末の過ごし方、行き先、そのための持ち物などが宣伝された。1927年にはベルリンで「週末」をテーマにした展覧会が開かれ50万もの来場者があったという<sup>18)</sup>。また余暇の広まりには、週48時間労働を雇用者側に遵守させ、余暇時間を確保しようとした労働組合の試みも寄与した。加えて、郊外に遊びに出かけるという余暇の過ごし方は、比較的安価な料金で利用できる郊外列車の発達によって促進され、また自動車の普及もこれに貢献した。「日曜日にはベルリン市民は大挙して、東西南北の40キロ、50キロ離れた場所に押し寄せていく。」<sup>19)</sup> また都市生活者は、地方の大家族とは

17) Ringelnatz, Joachim: Berlin wird immer Berlin. Berlin(Henssel Verlag) 1992, S.78. この詩はリングルナッツがようやく長年の願いがかない、ベルリンで職をえてミュンヘンから移ることができるようになった事情を反映したものである。

18) Lethen, S.201.

19) Scheffler (1931), S.184.

異なり、核家族を構成することが多くなっていたことも、余暇文化の発達に拍車をかけたと思われる。日曜日には一家揃って郊外にでかけるという余暇の過ごし方が定着していったのである。自然の大量消費に対して批判的な目が向けられることもあったが<sup>20)</sup>、多くの人は新しい余暇文化を楽しんだ。前章で見たように都市から逃げるために汽車で田園に向かうエッケンペンを取り巻いているのは、余暇を楽しもうとベルリンから繰り出してきた都市生活者である。エッケンペンはそのために汽車の中も「都市の延長」だと感じたのだが、それは当然のことであろう。彼の周囲の人々は都市との断絶を求めているのではなく、都市文化の一部であるウィークエンドを楽しもうとしているのであるから。

ある新聞に載った「新しいスタイルのウィークエンド。ベルリンの週末。過去と未来」と題する記事が、当時の余暇事情をよく伝えている。「ベルリンの週末の宣伝は戦後の数年間できわめて大々的に行われた。それは相応の効果を多くの大都市居住者に与えた。戦前には人々は日曜日に散歩をしていたのに、今は週末というものを過ごすようになった。[...]もはや以前のようにただ散歩に行くだけでなく、森でキャンプをしたり、シュプレー川、ハーフェル川、湖の岸辺近くで水浴をしたりするようになった。ポートを漕いだり自動車で走り、もっと郊外で休養しようとした。休養が最も重要なのであった。[...]ベルリンのウィークエンドは本当はどのようなものなのだろうか。人々は市街電車、路面電車、バスに乗って行く。森や湖を探し出す。休養する。そして日曜日が終わると再び市街に戻ってくる。」<sup>21)</sup>

20) 「でも町外れには、自然がここから始まると聞いていたのだが、自然はなく、本に描かれているような自然があった。[...]自然のかわりに都市の周辺に広がっているのは、概念としての自然、自然概念である。」とヨーゼフ・ロートは、エッセイの中で述べている。Roth, Joseph: Joseph Roth in Berlin. Ein Lesebuch für Spaziergänger. Hsg. von Michael Bienert. Köln (Verlag Kiepenheuer&Witsch) 1996, S.67.

郊外での週末は、交通網の整備と労働の合理化という近代的産業社会化と結びついて展開した運動であったが、こうして大衆に余暇が定着するにつれ、余暇自体の産業化が加速した。そして週末の郊外も、平日の都市と同様に混雑し、人々は消耗し疲れきって家路につくことになる。余暇自体が自己目的と化し、人々は休養を取るために週末を過ごすのではなく、ウィークエンドのためにウィークエンドを過ごすようになる。それでも人々はウィークエンドに郊外に行く。平日の市街地のような人混み、喧噪、慌ただしさに出会うので、実際には休養にはならないと分かっているが、休養のためによいとされる休日の過ごし方を模倣することで満足感を求めるのである。

都市の対立項としての意味が周辺の「自然」から失われ郊外となるにつれ、「自然」を人工的に作り出し都市に取り入れようとする試みが見られるようになった。これは公園や住宅地の緑地の設置という形で、都市計画の一貫として進められた。また家庭菜園運動が盛んになり、大都市周辺には多くの家庭菜園が作られ、休日には一家揃って郊外の菜園を手入れするという姿もよく見られた。カール・シェフラーは郊外の家庭菜園について次のように述べている。「イギリス人の間でウィークエンドと言われるものが、あつと言う間にベルリンに定着した。その結果の一つが、水辺と森の中のウィークエンド・ハウスである。これは往々にして、人の住める園亭が建っている家庭菜園にすぎない。だがこうした週末用の建物は郊外列車の終着駅にまで伸びている。」<sup>21)</sup>

家庭菜園は水辺や森の中のキャンプ場と異なり、個人的空間を保証してくれるものでもあった。もちろんすぐ隣には他人の家庭菜園が接している

21) Medefind, Heinz: Weekend in neuem Stil. Berlins Wochenende, wie es wurde, wie es sein wird. Aus: Berliner Börsen-Courier vom 15.5.1932. In: Glänzender Asphalt. Berlin im Feuilleton der Weimarer Republik. Hrg. von Christin Jäger u. Erhard Schütz. Berlin(Fannei&Waltz) 1994, S.256f.

22) Scheffler (1931), S.184.

が、自分が借りている土地の中では自分、家族そして植物と向かい合っていればよかった。この一時的な疑似隔絶感が、つねに他人にさらけ出されているためストレスを抱える都市生活者の間で、家庭菜園が急速に広まった要因の一つだと考えられるのではないか。さらにこうした家庭菜園は人々の心身上の健康に役立つものとされただけでなく、経済的にも重要な意味を持っていた。そこで収穫された野菜や果物の量は軽視できないものであり、またかなりの金額が家庭菜園で必要とされる道具とエネルギーに費やされ、賃貸料として支払われていたのである<sup>23)</sup>。すなわち家庭菜園運動も近代的経済システムの一部として機能していた。

都市生活者にとっては郊外の自然は、もはや都市と対立するもの、都市からの避難場所ではなく、都市の一部として消費の対象となった。また郊外の自然を消費しに出かけて行くだけでなく、疑似自然の体験を楽しむために、家庭菜園という空間も作り出された。そしてその消費のありかたは、広告、新聞、ラジオなどのマスメディアを通じて規定され増殖したものであった。

## 5. 欲望の場 — 『ベルリン アレクサンダー広場』

デーブリーンの『ベルリン アレクサンダー広場』(1929年)でも、主人公のビーバーコプフは恋人のミーツェ(本名ソーニャ)とポツダムやエルクナーに余暇を過ごしに行く。余暇と言ってもビーバーコプフはミーツェのひもであり、ミーツェ自身は売春で稼いでいるため、サラリーマンのような休日というわけではない。とはいえミーツェも金持ちのパトロンを二日間待たせて、ビーバーコプフと余暇を楽しむのである。またビーバーコプフはヴァンゼーの屋外プールに行ったりもしている。ベルリン市民の典

23) Lethen, S.202.

型的な余暇である。彼が訪ねる郊外にはすべて汽車の駅がある。汽車はビーバーコプフのような労働者階級にも郊外での余暇を可能にしていた。

その中でビーバーコプフの仕事仲間のラインホルトラが、ミーツェを誘い出してフライエンヴァルデまでドライブをするという場面がある。

「あつと言う間に彼らはフライエンヴァルデに着く。フライエンヴァルデはきれいで、水浴場がある。黄色の砂利のしかれた素敵な湯治場の庭園があり、そこを沢山の人が行き来する。」<sup>24)</sup>

フライエンヴァルデはオーデル川にほど近い湯治場である。そこを訪れるのは主に、ベルリンから自動車で来ることのできる人々、すなわちある程度富裕な層であった。ラインホルトやミーツェは泥棒や売春婦という胡散臭い商売の人間である。だがラインホルトは犯罪で稼いだお金と窃盗団の車のお陰で、またミーツェは金持ちのパトロンのお陰で、一時だけ富裕な市民層の仲間入りができるのだ。彼らはプロムナードを散歩し、テラスでお茶を飲み、コンサートを聴き、ベルリンのアレクサンダー広場周辺の喧噪と人いきれに満ちた日常とは別の世界を楽しむ。郊外の湯治場は非日常的な祝祭空間なのである。

フライエンヴァルデで彼らは森の中を散歩する。「この森には木がたくさん生えている。その中を大勢の人が腕を組んで歩いている。人通りのない道もある。彼らは夢見心地で並んで歩いて行く。ミーツェは何度も何かを訊ねようと思うが、何を訊ねたいのかわからない。人と腕を組んで行くって素晴らしいじゃないの。ああ、彼に聞くのはまた今度にしよう、こんなに美しい晩だもの。」(S.307f.) 都市から押し寄せた人が大勢いるが、彼らは人混みを避け、人通りのない木の生い茂った道を選んで歩いていったことだろう。そして非日常空間は、ビーバーコプフを裏切ることな

24) Döblin, Alfred: Berlin Alexanderplatz. Die Geschichte vom Franz Biberkopf. München(Deutscher Taschenbuch Verlag) 31. Aufl. 1992, S.306. 以下、引用に際しては本文中にページ数のみ記す。

ど思いも寄らないミーツェをも、その虜にする。その効果を高めているのは、人工照明ではない満月の光の美しさと、ラインホルトの差し出す、ビーバーコプフには欠けている逞しい右腕である。周囲の景色も、光も、音も、また自分の手を支えてくれる男の腕さえも、ベルリンでの日常とは異なった非日常を演出している。

フライエンヴァルデへのドライブは三日後に繰り返される。ラインホルトはビーバーコプフを陥れようと狙ってきており、加えて異常な女好きである。彼は彼女を力づくで手に入れようという決心を固めてしまっていた。彼女が抵抗するとラインホルトは彼女の首を絞めて殺してしまう。ラインホルトはそれまでに次々と女性を征服しては暴力を振るい捨てていたが、都市における匿名性ゆえに彼の異常な性癖は気づかれず、彼は性的欲望を募らせていき、ついには殺人まで犯すのである。「木々がゆらゆら揺れている、風が吹き始めたのだ。ひゅう、ひゅう、ひゅううーう。夜は続いていく。彼女の体は撲殺された。彼女の眼、彼女の舌、彼女の口、ねえ来て、あたしたちはもうすぐ家に着くわ、あたしはあんたのもの。木が一本めりめりっという音を立てる。森の端に立っている木だ。」(S.318) 暗闇、風が木々の間でたてる音、揺れ動く木々のざわめき、こうした視覚・聴覚上の現象には、人間の声や人間の身体表現が重ね合わせられている。風や木々の動きは、助けを求める人間が手を振っているようでもある。また木々と風のざわめきは、殺された女を悼む声でもあり、また彼女自身が嘆いているかのようにも聞こえる。森の木々と風は人間のように魂を宿し、郊外の行楽地は神話的・神秘的な空間となっている。

郊外の森は晩には暗闇につつまれる。都市からは駆逐されていく暗闇である。大都市では晩になると街灯がともし、真の暗闇は姿を消した。郊外はベルリンから車で短時間で来られるために都市の一部と化したか、そこにはまだ暗闇が残る。そして、夜の郊外の森に残る暗闇は、都市の表面か

ら駆逐された、人間の力では抑えがたい自然でもある。郊外の森は、都市生活に飽きた人々の目に快い緑を提供するばかりでなく、人間の悟性によっては抑制できない自然の力でもある。この自然力が支配する森の暗闇の中で、都市生活において増幅された欲望が爆発する。こうして郊外の森は、性的欲望を充足させるための暴力行為、そして殺人の格好の舞台となる。さらに郊外は多くの人が行き交う行楽地であるために、都市から郊外にやってきた人は、ここでも都市と同じように匿名のままであり得る。郊外は、森とその暗闇という自然と、匿名性、異常な欲望という都市現象とが交錯する危険な場となる。

## 6. 疎外と庇護 — 『しがない男よ、さあどうする』

ハンス・ファラダの『しがない男よ、さあどうする』(1932年)では、郊外が幾度も決定的な意味を持って現れる。まず主人公のふたり、ピンネベルクとエマが20代前半で始めて出会ったのが、都市郊外の行楽地であった。また、彼らが当初住んでいた中都市を離れてベルリンに移らざるをえなくなったのも、日曜日に郊外の行楽地に出かけ、ふたりで余暇を楽しんでいるところを雇用者に目撃されたことが、その直接の原因である。主人がピンネベルクと娘と結婚させようともくろんでいたため、ピンネベルクは結婚のことを伏せていた。その秘密が露呈したため彼は嫌がらせを受けて解雇されてしまうのである。日常生活、社会での人間関係、仕事から逃げようとして人は郊外に向かう。郊外はいわば都市における社会生活から逃避する場である。その一方で郊外は都市生活者が大挙して押し寄せる行楽の場であり、都市の延長でもある。ピンネベルクはこの二重性を見落としていた。

彼らはピンネベルクの母親を頼りベルリンに出て、ピンネベルクはつてを頼りマンデル百貨店で紳士用衣料の販売員としての職を得る。ベルリン

で彼らは始めはシュベナー通りの母親の元に下宿する。ここはティーアガルテン地区とモアビート地区が境を接する地域である。高級な住宅と商店が並ぶティーアガルテンと労働者の多く住むモアビートとの境という設定は、表向きは上流を気取りながらも吝嗇で、いかがわしい商売を営む母親の像に空間的な輪郭を与えている。

ピンネベルク夫婦は、母親の商売と家賃の高さのために、引越を決意する。アルト・モアビートにやっと見つけた住居は倉庫と映画館の屋根裏にあった。倉庫の一角に映画館が建てられたために、倉庫の二階にあった住宅の入口部分と一部がつぶされたり塞がれたりしてしまい、忘れ去られていたものである。当然、建築監督局が知ったら居住を違法とするだろう。ここに彼らが住んでいることを知っているのは大家と限られた友人だけである。ここは大都市の中の隠れ家であり、生まれた子供を含めて、ピンネベルクたちはここで一時平和な家庭生活を営む。ピンネベルク一家はベルリンの中で自己充足しており、彼らの目は外を向いていない。家族を庇護する私的空間としての家の役割は、すぐ隣に映画館があるという構図により、さらに強調される。隣の映画館に彼らは一度も足を踏み入れていない。都市の新たな娯楽である映画は大衆に向けたものであり、映画館は社会的空間である。それに対し家の中の家族空間はもっとも私的な空間である。ピンネベルク一家は映画館のすぐ隣に暮らしながら、家という岩の中に引きこもっているのである。

ピンネベルクが合理化による人員削減で解雇されてから一年経って、一家は収入に見合った郊外の住まいに移る。新しい住まいは、彼の友人が以前叔母から相続したという土地つきの園亭である。この間の事情は次のように語られている。「彼らが犯したもっとも重大な誤りは、もちろん、彼が失業してから一年間も、プットブレーゼのところに高い住居を借り続けたことだった。90マルクしか収入がないのに40マルクもの家賃を払うなん

て。あれは狂気の沙汰だった。しかし彼らは心を決めかねたのである...最後の所有物を諦めるなんて、家族だけでいられること、一緒にいられること...」<sup>25)</sup>

ピンネベルクの百貨店での月給は170マルクであった。これは下層のサラリーマンの平均的給与である<sup>26)</sup>。その給与も入らなくなり彼らは失業手当で食いつなぐようになる。家族だけの私的空間に固執していた夫妻は友人の申し出に救われる。友人が相続したという園亭は「ベルリンの東、少しばかり、40キロ離れており、もはやベルリンではない」(S.291)のだが、土地もついており、何より家賃がただ同然である。

片道一時間かかる鉄道は、ベルリンとこの土地を結ぶと同時に、またこのように遠くまで広がった郊外とベルリンとの隔たりを再確認させる道でもある。ピンネベルクは、ベルリンの職安に行き失業手当をもらい職探しをしなければならず、そのため毎週二回汽車でベルリンに通う。汽車の中で彼は毎回、ベルリンから郊外に移り住まざるをえなくなった経緯、役所の官僚主義的な態度、未払いの家賃の払いが溜まっているため会う度に浴びせられる前の大家からの皮肉を、思い出さざるをえない。郊外からベルリンに向かう汽車が走る空間的距離には、それまでの時間が凝縮して現れてくるのである。「ピンネベルクは、汽車に乗っている間、こうしたことをみな思い出し、[...]彼の切符をじっと見つめる。切符は黄色くて、50ペニヒする。帰りもまた50ペニヒする。ピンネベルクは町の職安に週二回行かなければならないので、彼がもらう援助金18マルクのうち2マルクは汽車賃で消えてしまう。ピンネベルクはこの汽車賃を支払わなければならない度に憤慨する。」(S.291) そして無駄に支払わなければならない2マル

---

25) Fallada, Hans: Kleiner Mann – was nun? Hamburg (Rowohlt Taschenbuch Verlag) 1993, S.289. 以下、引用に際しては本文中にページ数のみ記す。

26) 史料によると、1925年の下層サラリーマンの平均月給は162マルク、中流サラリーマンでは267マルク、高級サラリーマンでは372マルクであった。Lethen, S.210.

くと週に二回のベルリンとの往復が、自分がアウトサイダーだということ、どこにも帰属していないということを、彼に強く意識させる。「もちろん郊外団地から通う人のための切符もあり、こちらの方が安い。しかしこの定期券を手に入れるには、ピンネベルクは、現在住んでいるところに住んでいなければならない。だが彼はそこに住むことが許されない。また彼が住んでいるところにも職安はあり、そこへは汽車賃など払わずにスタンプを押しに行くことができる。だが彼にはそれが許されない。彼は、現在住んでいるところに住んでいないからだ。職安にとっては、ピンネベルクは、ブットブレーゼのところに住んでいるのだ、今日も明日も、永遠に。彼が家賃を払えるかどうかなどは問題ではない。」(S.291)

彼は公には郊外に住んではならない。家賃がただ同然の新しい住まいは園亭であり、居住は禁じられている。そして住んでいない地域の職安に行くには、そこで仕事が見つかる見込みがなければならない。こうして法律と官僚主義によりがんじがらめになり、ピンネベルクは、ベルリンと郊外との間を振り子のように行ったり来たりするのである。この空間的移動は一回きりのものではない。週に二回、いつまで続くか分からないのである。彼はベルリンと郊外という二点間に閉じこめられ、過去に縛り付けられ、永遠に同じ所をぐるぐると周り続けるほかない。エマは夫のこの状態を評して言う。「彼がここ郊外にじっとして、闘う目標がないってということこそ、ひどいことなのよ。彼にできるのは待つことだけ。何を？何を？待ち受けるべきものは何もないのよ。ただ待つだけ。」(S.304)

郊外の家庭菜園つき園亭。ここは本来なら、大都市ベルリンで働くホワイトカラー層や比較的高所得の労働者が、週末に余暇を過ごしにやってくる所であった。「耕地が長いこと放置されている所に、ベルリンの人たちはシュレーバー菜園、家庭菜園地区を作った。一家ごとにちょっとした建物と畑、菜園、花畑のある、ほろりとさせるほど手入れの行き届いた場

所。そしてここは地区全体が咲き誇り、巨大な花壇、何千もの花の園ができあがった。そしてこの世界は（都市の新たな拡張と企業家が盛んに行う建築によって繰り返し脅かされているので）東の間の存在にすぎないのに、いやもしかしたらだからこそ、こうした園亭と庭園は仮のものだとか漂泊するものだという感じはしない。むしろずっと続くパラダイスのようであり、プロレタリアの、あるいは小市民の、至福の野なのである。シャツ一枚の男たちが種を播き、母親たちは水やりをし、娘たちは豆の莢をむいているが、彼らはずっとこの仕事だけをしてきたかのようだ。彼らが庭園にいる様は、日がな一日ミシンのペダルを踏み続け、電線を敷設したり桿鉄を打ったり[...]していた人たちが晩や日曜日に休養しているようには見えない。」<sup>27)</sup> これはフランツ・ヘッセルが1929年に「ベルリン散歩」と題してまとめた本の中に収められたエッセイ調の小品である。ここでは家庭菜園地区は至福の園にたとえられ、人々は畑仕事に心から打ち込んでいるように見える。ヘッセル言うところの「都市生活者の緑色の幸福」は、家庭菜園での「牧歌的な仕事」とベルリン都市部における日常の労働との対比によって、さらに強調されている。ヘッセルはこのように修辞を駆使し家庭菜園における牧歌的な幸福を賛美している。労働から解放された余暇時間を、疑似自然の中の空間、しかも家族ごとに区切られた私的空間で過ごすというささやかな幸福感は、多くの人に共有されたにちがいない。

だがピンネベルク一家は、生きていくために家庭菜園地区に住まざるをえないのだ。彼らにとっては畑仕事もまた、飢えから身を守るために生活の糧をえる手段である。こうして家庭菜園地区に追い込まれた、または取り残されたのは、彼ら一家だけではない。「今は冬で、3000区画からなる

---

27) Hessel, Franz: Nordwesten. In: Ein Flaneur in Berlin. Berlin(Das Arsenal) 1984, S.231.

この大きな住宅地に住んでいるのは、多くて50人であった。部屋代をどうにか工面することができた者や親戚のところにもぐりこむことができた者は、寒さ、汚れ、孤独から町へと逃げて行った。」(S.284) 狭い園亭がたち、荒れた菜園が広がる郊外は、都市の「外部」、都市から疎外された者たち、都市には属さない者たちの寄り集まる場となった。

しかし郊外はこうした家庭菜園地区からだけ成り立っているわけではない。近くには瀟洒な庭つきのヴィラが並ぶ住宅地もある。19世紀末から20世紀初頭にかけて多く建てられた、自然を重視し、同時にモダンで快適な生活への配慮もなされた、設備の整った住宅が並ぶ。そこに住むのは、ピンネベルクのように都市から放り出された者ではなく、都市部の劣悪な住環境を嫌って郊外に移転してきた上流の富裕な市民である。ヴィラと荒れた家庭菜園地区の対比は、社会的分裂を視覚化し、強烈に意識させる。こうしたヴィラのひとつにピンネベルクは金を受け取りに行かねばならない。それはエマが家計を助けるためにしている繕い物の代金なのだが、このヴィラの住人は払いを滞っているのである。「そのヴィラは前庭にあって、道からちょっと引っ込んだところにあった。とてもきれいな大きなヴィラで、その後ろ側はきれいな大きな果樹園となっていた。ピンネベルクはそれが気に入った。」(S.286) だがここの住人に彼は虫けらのように扱われる。これは、郊外における、社会的中心と外部という構図の繰り返しである。ヴィラの住人は高所得を得て、自由に都市と郊外を行き来できる。彼らは都市と社会の中心に属している。ピンネベルクは中心からはじきだされ、郊外でもまた、ヴィラの住人から、いわば外に放り出される。これにより彼の疎外は強調される。

彼は失業保険を受け取りにベルリンに行ったまま、都市の路上に留まろうとする。彼は疎外を強く感じさせられる郊外には戻れないのである。「ピンネベルクはフリードリヒ通りを、ライプツィヒ通りとウンター・デ

ン・リンデンの間で、もう四度も行ったり来たりしている。彼はまだ家に帰れない、ただ帰れないのだ。家に帰るとまた、何もかもがおしまいだ。生活はかすかに光を発してくすぶりながら、続いていく。ここで何か起こったっていいだろうに。」(S.299f.)

しかしここでも彼は、保安警察官により浮浪者としてぞんざいに扱われ、都市の中心部でもよそ者、はみ出し者でしかないことを改めて思い知らされる。彼はこのとき、汚くなっているネクタイをはずしてしまっていた。ネクタイはサラリーマンの象徴である。ネクタイをはずすと同時に、彼は疎外の事実を受け入れた。それまではサラリーマンの外見を保つことで、ホワイトカラー層への帰属感を抱いていたし、また再就職の希望も捨てていなかった。しかしネクタイをはずすことにより、彼はこの帰属感の虚偽性を認め、同時に、浮浪者として扱われる可能性をも受け入れてしまったのである。保安警察官にこづかれた後、彼は疎外感と劣等感にさいなまれながら町をさまよう。

その間エマは、繕い物の仕事から戻り、彼の帰りを心配しながら家で待っている。郊外ではエマは家計を助けるために毎日仕事にでかける。そのため家事はピンネベルクの役目となっていた。この役割変換を彼は、帰属すべき場の喪失と受けとめていたに違いない。「〈君に養ってもらおうと思って、君と結婚したわけじゃない。〉と彼は頑固に言う。」(S.282) 妻の仕事のために、家庭という帰属できる場が失われたように思われ、彼の疎外感は一層高まっていたのである。

しかしエマは家を捨てて仕事に生きているわけではない。彼女が仕事をするのはあくまでも家計を支え、家族というまとまりを維持するためである。だから彼女はピンネベルクの帰りを案じて待つ。そして夜の闇の中、彼を待ち戸口に立つ彼女の背後の家からは暖かな光がもれている。「彼女に見渡せる限り、住宅地には明かりは見えなかった。ただ彼女の背後にあ

る、彼女たちの小屋の窓にだけ、石油ランプの赤味をおびた光が穏やかに輝いていた。」(S.308) この図を目にしたとき、ピンネベルクは再び帰るべき家、自分が属する「家」を獲得する。フリードリヒ通りの華やかなネオンサインは、自分が都市の中心からはじき出された人間であることを思い知らせるものであった。一方、真っ暗な郊外の住宅地にぼつんと灯る暖かみのあるランプの色は、「家」という語に集約される親密な内的空間の象徴である。

こうしてふたりは「家」の中に入っていく。「[...]このうえなくやさしい、緑の波が彼女を持ち上げ、彼女とともに彼をも高みに引き上げていく。彼らは滑るように昇っていく。星がいくつもすぐ近くで瞬いている。[...]前から知っている幸せだ。昔ながらの愛だ。どんどん高く、汚れた地上から星のもとへ。それから彼らは二人とも、息子の眠る家に入った。」(S.310) 郊外の園亭はもはや敗残者たちの住まう小屋ではなく、親密な空間、「わが家」なのである。こうして郊外は、疎外の場合から帰属の場合へと変容し、都市と郊外の関係は逆転する。都市は外部に、郊外は内部となる。

## 7. 生きられた空間としての郊外

ベルリンは都市としての発達が遅く、19世紀後半に急激に大都市へと成長した。それに伴って郊外も急速に発展した。そのため、郊外はつねに生成変化しており、一時的で束の間の存在という意味あいを特に強く帯びていた。それは先に挙げたヘッセルの引用からも明らかであるし、またシェフラーは郊外住宅地の建物がみな「試験的建築物にすぎない」<sup>28)</sup>と述べている。こうした束の間の存在は、完全に都市の一部となることで永久

28) Scheffler (1931), S.178.

的な存在形態を獲得すると考えられたのであろう。

また、新しく成立した郊外は、その歴史性の欠如のため、空虚な空間であり、いわば白紙状態にあった。そのためこの空虚を意味で満たす試みが多く行われた。19世紀末から20世紀初頭のヴィラ・コロニー建設を推進したフォン・カールステンらは、都市部から失われた「自然」が残る場という意味を与え、都市との差異を強調した。タウトやマイアーといった、いわゆる即物主義の建築家は、光と空気を取り入れた均質な団地を構想、建築した。

しかし本稿で見てきたように、郊外のヴィラは自然を想起させるよりも、社会的矛盾を意味してしまうかもしれない。また良質で均質な団地も、ある者にとっては画一化の脅威となって立ち現れるかもしれない。理念はある程度まで郊外の意味形成を促したが、実際に郊外を生きる様態、また人が郊外に投影したり郊外から読み取る意味は、必ずしも理念とは一致しない。生きられた郊外の様態は、都市化された田園という否定的なものから「家」という内部空間まで、多様なものである。そしてこの様態の多様性は、都市化、近代化のプロセスにともなう時間軸にそった変化でもあり、そこには住まう場、労働と余暇の場、鉄道網とマスメディアの発達といった様々な要因が関わっているのである。

# Vorort und Stadt

## Berlins Peripherie in einigen literarischen Texten der Weimarer Zeit

Yumiko Washinosu

In der Weimarer Zeit stand das Thema Großstadt Berlin in der Kunst, in der Literatur und im Journalismus auf dem Höhepunkt seiner Beliebtheit. Dem Vorort wurde dagegen nur selten Beachtung geschenkt. Die vorliegende Arbeit befaßt sich aufgrund einiger literarischen Texte mit dem Thema Vorort und soll herausarbeiten, wie ein Vorort wahrgenommen und erlebt wurde. Es handelt sich also um den Vorort als erlebten Raum.

Seit der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts entwickelte sich Berlin rasch zur modernen Großstadt. Die explosive Zunahme der Einwanderer führte zur Verstädterung der umliegenden Orte und zur Entstehung der Vororte. Der Vorort grenzt an die Stadt sowie das Land, gehört aber zu keinem der beiden, ist ein Zwischenort. Der Vorort hat auch keine Geschichte wie die Stadt selbst und ist sozusagen ein Vakuum.

Die Leere des Vorortes in Hinsicht auf Geschichte wie Bedeutung versuchte man seit seiner Entstehung zu füllen. So bauten die Vertreter der Villenkolonie-Bewegung und der Landhausideologie Vororte "landschaftlich" und hoben die von der Stadt verlorene „Natur“ darin hervor. Die Architekten der Neuen Sachlichkeit bauten ihrerseits Siedlungen mit gleichmäßigen Bauten, in die frische Luft und Sonnenlicht hineindrangen. Für die Neue Sachlichkeit bildete der Vorort den Raum des völlig neuen und rationalen

Lebens.

Wie aus der Betrachtung der literarischen Texte hervorgeht, sind die Modi, wie man den Vorort wahrnahm und erlebte, jedoch nicht konform mit den Ideen der Stadtplaner und der Architekten. „Berlin“ von Paul Burk, ein von apokalyptischen Visionen durchdrungener Großstadroman, stellt den Vorort als einen negativen Raum dar, der von der Vampir-Stadt verschlungen wird. In Döblins „Berlin Alexanderplatz“ erscheint der Vorort Freienwalde als gefährlicher Ort, wo durch die Nähe zur Großstadt und die Anonymität einerseits und durch die Dunkelheit im Wald andererseits der in der Stadt ins Extrem getriebene und jedoch verdrängte Trieb ausbricht. Der Vorort erhält erst in Falladas „Kleiner Mann — was nun?“ den Rang von „Zuhause“: am Schluß des Romans wird der Vorort, wo der Held die Entfremdung und Ausgeschlossenheit von der Stadt spürte, zum Ort, wohin er gehört und zu dem heimkehren kann.

(慶應義塾大学非常勤講師)